

故郷の人物を知ろう

たかおか

おん こ ち しん
温 故 知 新

勤王の志士・官吏

へんみ ぶんくろう
逸見 文九郎(1825~75)

文九郎は高岡守山町の蔵宿(藩士給米の米商人)高
原屋14代目で、町役人、漢詩人、勤王家、官吏。幼名直
太郎、文九郎は通称。名は在綱、又一。字は有秋、号は舩
斎、方舟、晩香圃など。幼時より学を好み、詩文書画に
秀でていました。のち京都で儒者・頼三樹三郎や医師・
勤王家の小川幸三(靖斎)らと親交。のち幸三とは義
兄弟の契りを結びます。帰郷して医者になりますが、
幾度か上京、志士を主に資金面で援助しました。

義兄で高岡の医師・勤王家の山本道斎にも多大な
影響を受け、三樹三郎、大槻磐溪(儒者)、関雲(瑞龍
寺18世)らにも学びました。また木戸孝允にも会い攘
夷から王政復古に論を変えました。

1864年、禁門の変が起こると
藩論は一変し、13代前田齊泰は
勤王派を弾圧。幸三が金沢で投
獄(のち斬首)されると、文九郎
も弟の中条屋六郎右衛門(川上
三六)と連座して投獄。70余日
(この間、妻病没)後の釈放の帰路、
歓迎する高岡町民が絶えなかつ
たといひます。



逸見文九郎肖像

維新後、藩庁に高岡の産業開発論を提出。官吏とな
り新潟、京都で歴任。東京行幸に活躍しました。1869
年6月、官を辞しましたが、10月藩に出仕、1871年9月、
病で退職。翌年4月、七尾県創設に尽力するも、8月病
を再発して辞職しました。

墓は瑞龍寺。1925年、従五位追贈。古城公園本丸南
の土塁上に兄弟の顕彰碑があります。(仁ヶ竹主幹)

問合先 博物館 ☎ 20-1572